

覇権国から均衡重視に変化した米国



国際秩序を覆そうとする国家の出現でアジアにおける同盟諸国の絆が深化

中国やロシアは南シナ海やウクライナに「力」で進出し、東南アジア諸国連合(ASEAN)やヨーロッパ諸国の最大の懸念すべき問題となっている。この状況をアメリカの政治学者のウォルター・ミードは「リビジョニスト・パワーの復讐」として警鐘を鳴らしている(Foreign Affairs誌5/6月号)。リビジョニスト・パワーとは、「力」で現在の国際秩序を覆そうとする国家とミードは指摘している。その出現は、反発するナショナリズムの台頭を促し地域情勢を益々不安定化させる。事実、中国の「力」による侵略に対する怒りは暴動となりベトナム国内で爆発しつつに中国人の死傷者まで出した。

日米はパワー・シエアリングを

問題は無視し、リビジョニスト・パワーに米国がどう対応するかである。

5月12日、ケリー国務長官は中国に対して「挑発的だ」と批判したが、同時に「中国とベトナムは、海上

政策に関係なくバランスそのものを維持その過程で自らの利益実現を追求

その状況下で東シナ海で中国からのチャレンジを受ける日本の立ち位置はどこにあるのか。日本は尖閣諸島をめぐる米軍から均衡重視を求められたり、あるいはバックパッシングされ、中国に対して受け身の国になってはいけない。日米本はアメリカとともにあり、主導的な国でなければならぬ。そうでなければ、日本は安全保障のシエアリング(軍拡競争)による戦

また、中国と激しく対立した。

「力」で資源開発を進める中国に対して結束して牽制

日本は受け身で対応するのではなく、米国と主導的な役割を果たす国に

その状況下で東シナ海で中国からのチャレンジを受ける日本の立ち位置はどこにあるのか。日本は尖閣諸島をめぐる米軍から均衡重視を求められたり、あるいはバックパッシングされ、中国に対して受け身の国になってはいけない。日米本はアメリカとともにあり、主導的な国でなければならぬ。そうでなければ、日本は安全保障のシエアリング(軍拡競争)による戦

するフィリピンはベトナムと共鳴し反中の動きは広がりを見せ始めている。越比は首脳会談を開催し中国問題を話し合い、ASEANは5月10日の外相会議で、中国の行為は「地域の緊張を高める」とし「重大な懸念」を表明した。

さらに11日には、「自制と武力不使用を求める」首脳宣言を採択した。一方的に独自の管轄権を主張し

兵器使用に対して軍事力を行使するとしながら行使をせず、ロシアのクリミア半島の強制統合に対してオバマ大統領は「力」ではなく経済政策でバランスをとることを宣言した。

これら一連のオバマ政権の対応は、明らかにアメリカが「覇者」の役割を放棄して19世紀のイギリス同様の「均衡を保つ国(バランス)となったことを意味する。オバマ大統領が「アジアへのリバランスを行う」と宣言した時からアメリカは覇権国から均衡重視のバランスへと理解すれば一連のアメリカの言動が理解できる。

国際政治学者のハンス・モーゲンソウは「ある潜在的征服者と、それに対抗し独立を守る諸国家の同盟

との闘争は、バランス・オブ・パワーの典型的な例である」と述べている。その役目はバランス・オブ・パワーの維持であり、他国の「力」とバランスをとる過程で自らの利益実現を追求する。その特質は、いずれかの陣営の国家政策に同意するとは限らず、その唯一の目的は政策に関係なくバランスそのものを維持することにある。そしてその特質は「栄光ある孤立」(その「中間」に位置)にあるとモーゲンソウは説明する。

バランスとなった米国は地域ごとにそれに対応する抑止を展開すればよい。また、地域ごとの潜在的脅威に対して均衡が必要な担当国がいればバックパッシング(不足を補う)することが可能となる。